

『説得』に見る、ジェイン・オースティンの新たな 試み：主人公の内面の葛藤の決着

福永, 綾
九州大学大学院：修士課程

<https://doi.org/10.15017/4377724>

出版情報：九大英文学．61，pp.21-42，2019-03-31．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：



『説得』に見る、ジェイン・オースティンの新たな試み

—主人公の内面の葛藤の決着

福永 綾

1. 序論

『説得』(*Persuasion*)は、18世紀後半から19世紀初頭のイギリスの地方紳士階級社会を中心に描いたジェイン・オースティン(Jane Austen)が、最後に完成させたとされる長編小説である。本作は、これより前に完成している5作品とは趣の異なる作品として考えられることが多く、たとえば二十世紀の女性作家ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)が、本作品にオースティン文学の変化の兆しを感じ、「独特の美しさと単調さ(a peculiar beauty and a peculiar dullness, 180)」を見出したことは有名な話である。そんな本作品の特徴として特筆すべきは、ヒロインが27歳という、女性の結婚の問題を扱うオースティンの作品としてはやや高齢に設定されている点と、作品の語りがほぼ全体を通して、ヒロインの内面に非常に寄り添ったものである点だろう。

本作のヒロイン、アン・エリオット(Anne Elliot)は、高雅で優しい心を持つ、准男爵家の次女である。彼女は早くに聡明な母親を亡くして以来、父親や姉から不当に軽んじられている。このようなアンの境遇について、たとえばJohn Wiltshireなどは、『エマ』(*Emma*)の恵まれた境遇のヒロインと比較して、「苦しみの肖像(a portrait of suffering, 155)」と述べている。しかし作品に描かれるアンの苦しみは、家庭環境によるものだけではない。アンは19歳

の時に、母代わりのような存在であるラッセル夫人(Lady Russell)に説得されて、海軍軍人ウェントワース大佐 (Captain Wentworth) との婚約を解消し、その後彼への愛着と後悔に苦しむことになるのだ。本作の語りは、ウェントワース大佐との恋が破れてから8年が経過した時点から始まる。アン・エリオットは、冒頭から二重の苦しみを抱えた哀れなヒロインとして読者の前に立ち現れる。

本作品の語りでは、ヒロインの意識が焦点化される割合がオースティンの他の作品と比べて圧倒的に多い。長い時を経ても消えない、ウェントワース大佐に執着するアンの意識が、さまざまに舞台を移しながら、繰り返し描かれるのだ。このことが、ウルフの言う「独特の美しさと単調さ」を生み出しており、作者オースティンが創作において何か新しい試みをしようとしていることを感じさせる。

これまでの研究の多くは、アンの人間的魅力に注目し、「なぜアンがウェントワース大佐の愛情を取り戻すことができたか」について論じている。つまり、意中の男性の愛情を取り戻したことによるヒロインの幸福な結婚が、作品の山場として捉えられてきたのである。しかし、8年という長い時間を背景に持つこの作品だけに見られるテーマとして、「ヒロインが自らの過去とどう折り合いをつけたか」という、アンの内面の葛藤の終着に焦点を当てた研究は少ない。そこで本稿では、『説得』はオースティン作品の中で唯一、ヒロインの「理想的な結婚」が山場ではない作品だと考える。本作品におけるクライマックスは、ヒロインが自らの心の葛藤に決着を見出した瞬間ではなからうか。

以上を踏まえ、本稿では、本作品の主プロットの背後に描かれている、アンの内面の葛藤の決着にこそ、オースティンが本作品で描こうとした重要なテーマを読むことができる、という視点から、『説得』を読み直すことを試みる。

2. 主人公の過去を巡る矛盾の苦しみ

2. 1. ウェントワース大佐との過去に対する矛盾した認識

本章では、ラッセル夫人の説得に従ってウェントワース大佐を自ら手放してしまった過去について、27 歳になったアンが矛盾する認識を抱いていることと、その矛盾による葛藤が彼女の心をいかに苦しめているかを明らかにしたい。

本作品の冒頭第 3 章までは、エリオット家当主ウォルター卿 (Sir Walter) とその長女エリザベス (Elizabeth Elliot) が、いかに虚栄心が強い愚かな人物であるかが描写され、ヒロインであるアンのごとはほとんど語られない。次女アンは家庭では「ただのアン (only Anne)」であり、まったく重きを置かない影の薄い娘であることが描かれる。ただしここでのオースティンの主な意図は、ウォルター卿やエリザベスの愚かさを笑うことではない。彼らの愚かさの陰に隠れ、謎に包まれているアンの胸中にこそ、読者の関心が向くことを作者は狙っている。アンの過去について触れられるのは第 4 章で、ここで初めてアンがどのような過去を背負った存在であるかが明かされる。19 歳当時のアンは心優しく容姿端麗な娘で、当時陸地で休暇を過ごしていたウェントワース大佐と出会ってすぐにお互いを好きになり、婚約を交わしたという。階級意識の強いウォルター卿やエリザベスは、軍人と婚約したアンに冷たい態度を取ったが、この二人の冷淡な態度は以前からのものだったので、アンは耐えることができた。しかし、心から自分を心配している母親代わりのラッセル夫人からの反対を受けると、動揺せずにはいられず、夫人の説得に応じる形で、彼女は婚約を破棄した。しかしそのことでアンの受けた苦しみは大変なものであったことが、次の引用からうかがえる。

Her attachment and regrets had, for a long time, clouded every enjoyment of youth; and an early loss of bloom and spirits had been their lasting effect. (28)

アンのウェントワース大佐への愛情は一時の感情ではなく、長い時を経ても消えない、心深くに根を張ったものであったのだ。それゆえに、彼を失った悲しみと絶望はアンの心身を蝕み、彼女は早くに容色と活力を衰えさせた。婚約破棄後 8 年が経過した物語冒頭の時点で、29 歳の姉エリザベスの方が妹のアンよりも若々しさを保持しているという描写があるが、これもアンが失

恋という経験によって容色を衰えさせたことを強調している。

アンはウェントワース大佐との婚約を解消した後もずっと、彼の魅力に心をとらわれたままで、他の男性に求婚されても、妥協の結婚を選ぶことはなかった。しかし、当時のイギリスの地方紳士階級社会において、女性であるアンが生きていく手段として最も望ましいのは結婚することであった。結婚しなかった場合は親兄弟の家にとどまるか、家庭教師の職に就くなどの道があったが、それらは不名誉なことでとされていた。特にアンは不遇な家庭環境にあるので、結婚によって、冷酷な父や姉のいる家から脱出するのが望ましいということが冒頭から暗示されているのだが、彼女は安易に結婚の道を選ばない。アンが心がそうしてウェントワース大佐の魅力にとらわれたまま、8年の月日が流れる。27歳になったアンは、8年前のラッセル夫人の説得に関して、次のように振り返っている。

She did not blame Lady Russell, she did not blame herself for having been guided by her; but she felt that were any young person, in similar circumstances, to apply to her for counsel, they would never receive any of such certain immediate wretchedness, such uncertain future good. – She was persuaded that under every disadvantage of disapprobation at home, and every anxiety attending his profession, all their probable fears, delays and disappointments, she should yet have been a happier woman in maintaining the engagement, than she had been in the sacrifice of it (29)

自身の過去についてアンは、説得したラッセル夫人が悪かったとも説得された自分が悪かったとも思っていない、と語る。しかし同時に、婚約を守った方が幸福になれたはずだ、とも考えている。つまり、アンは明らかに8年前のラッセル夫人の説得、あるいはそれに従った自身の判断に対して是認しがたい思いがあり、後悔の念を引きずっているにもかかわらず、その過去を無理やり正当化しようとしているのだ。アンのこの矛盾する意識を生み出しているものは何か。それは、ウェントワース大佐への残存する恋心と、その恋心をもはや成就させることができないという事実認識である。アンはこの二つに板挟みになって苦しんでいると考えられる。アンは、27歳の現在に至るまでずっとウェントワース大佐の魅力を心の中で評価し続けているが、彼と

は離れ離れになってしまっているうえ、偶然再会することができたとしても自ら婚約を破棄してしまったという過去があるために、彼と結婚することはもはや叶わない、という如何ともしがたいジレンマを抱えている状態にある。この状態が、自身の過去に対するアンの矛盾をはらんだ意識を生み出している。つまり、アンの心はウェントワース大佐の魅力にとらわれたままであるが、その思いを成就させることが叶わないという現実的な認識が、過去を何とか正当化しようとする心の動きに結びついているのだ。このように、物語冒頭のアンにとって、自身の過去の意味は揺れ動いている。この精神的な不安定さが、いつそ彼女を自信に欠けた影の薄い存在にしている。

2. 2. 揺れ動き続ける意識

アンは、自身の過去への評価が揺れ動いている状態のまま、偶然にもウェントワース大佐と再会を果たすことになる。アンは妹のメアリ（Mary Musgrove）の嫁ぎ先であるマスグローブ家に滞在していた時、マスグローブ家の新たな友人として、大佐が訪ねてくることを知らされる。この時アンの心には“a thousand feelings” (56)が押し寄せたという。この千もの感情には、8年ぶりに大佐と会う緊張、気まずさ、不安、そして喜びもまた混ざっていただろうと推測できるが、語られていないので、実際のところはアン本人にしかわからない。あるいは、アン自身にもよくわからない不条理な感情群だった可能性もある。どちらにせよ、アンの感情の実態がわからないように描かれているからこそ、彼女のウェントワース大佐への執着の強烈さ、不条理さがかえって鮮明に浮かび上がってくるのだ。この再会は5, 6分で終わり、緊張の糸が切れたアンは、「最悪の時が終わった!」と歓喜する。しかし彼女はすぐに我に返って、感情を抑えようとし始める。その際のアンの心の声は、やはり矛盾をはらみ、揺れ動いている。それは次のように描写される。

Soon, however, she began to reason with herself, and try to be feeling less. Eight years, almost eight years had passed, since all had been given up. How absurd to be resuming the agitation which such an interval had banished into distance and indistinctness! What might not eight years do? ... Alas! with all her

reasonings, she found, that to retentive feelings eight years may be little more than nothing.

Now, how were his sentiments to be read? Was this like wishing to avoid her? And the next moment she was hating herself for the folly which asked the question. (56)

アンは、ウェントワース大佐に関するすべてを諦めた過去から8年も経った今、心を再び興奮させることは愚かであり、8年という月日にはすべてを忘却させる力がある、と考えている。しかしすぐに彼女は、8年という月日など無に等しい、と全く逆のことを考え、「現在の彼の思いはどうなのだろう」と思いを巡らせようとするが、次の瞬間には、そんな疑問を抱く自分の愚かさを憎んでいる。このように、ウェントワース大佐に再会した直後のアンの心は激しく揺れ動いている。彼への諦めきれない恋心と、その恋心に身を委ねることの不毛さへの意識が、再会前よりもさらに具体性を増して、衝突し合っているのだ。前述した、アンの過去に対する評価の揺れ動きは、こうしてウェントワース大佐との再会後の彼女の葛藤に、より苦しみをもたらす形で連続している。

この葛藤は、アンをがんじがらめの状態にしている。彼への恋心に蓋をして妥協の結婚を選んでも、アンは結局、自分の残存する恋心との葛藤に苦しめられるだろう。しかし彼への恋心を保持して独身を貫いたところで、「苦みの肖像」たる不遇な家庭から一生脱出できないという苦しみが生じるので、幸福にはなれないだろう。アンはこの矛盾を、この苦しみを解消するすべを知らない。そのため、何とかこの苦しみに呑み込まれないように耐えようと努力する。アンの置かれた状況を考慮すると、この努力は一個人としてのアンの精神が試みることのできる、最大の努力であると言えるだろう。この努力の過程は、主プロットの裏で描かれるアンの内面の物語の根幹をなすものである。章を改めて分析していきたい。

3. 葛藤に耐えるアン—情念と距離を保つこと

3. 1. アンの情念との距離

アンはウェントワース大佐を巡るどうしようもない葛藤に苦しみもがくヒロインであることを前章で確認した。しかし彼女は大変忍耐強い性格であり、その苦しみを他人の目に触れる形で表出させることはない。これはアンの大きな特徴として注目に値し、本作品の重要なテーマを表す要素の一つだと言える。ではアンは、葛藤の苦しみにどのように耐えているのか。そして、葛藤の苦しみに耐えることに、本作品ではどのような価値が与えられているのか。本章ではこの2点の分析を試みる。

ウェントワース大佐との気まずい再会を終えた直後のアンは、そう感じる事が愚かだとは知りつつも、ウェントワース大佐が現在の自分のことをどう思っているのかを知りたいと感じる。これに関しては、すぐにメアリから情報が与えられる。アンのいないところで、アンのことをどう思うかと尋ねられた大佐は、「見分けがつかないほどに変わってしまった」と答えたというのだ。メアリにそのことを伝えられたアンは、深い屈辱を感じつつも、その言葉を甘受する。

“So altered that he should not have known her again!” These were words which could not but dwell with her. Yet she soon began to rejoice that she had heard them. They were of sobering tendency; they allayed agitation; they composed, and consequently must make her happier. (57)

アンは、容姿の衰えを大佐から指摘されたことに大変なショックを受けるが、すぐに気持ちを切り替えて、大佐が自分に無関心であることを知れたことに喜びを感じ始める。その喜びの理由を、興奮し動揺してしまった心が鎮まり、無用な高揚感や期待を抱かずに済むことで、結果的にはより幸福になれるからだと彼女は述べている。アンは心を苦しめる不条理な恋心にとらわれることをよしとせず、情念から距離を取ることで、心の平穏を保とうとする。

また、Crane を始めとする多くの研究者が指摘しているように、アンには日常生活において人の役に立とうとする志向性があるが、有用であることに喜びを感じるこの姿勢は、彼女の、不条理な情念から距離を取ろうとする姿勢とも結びつけることができる。アンはある日のダンスパーティーで、ウェ

ントワース大佐がマスグローブ家の令嬢であるヘンリエッタ (Henrietta)、ルイーザ (Louisa) と親しくする様子を目の当たりにする。その時点でのウェントワース大佐の心には、アンの過去の振る舞いに対する憤慨の気持ちが渦巻いていたため、彼はアンに冷淡な態度を取ったのだ。アンは失望や悲しみ、あるいは嫉妬の気持ちなしにその光景を見ることはできなかつただろう。しかしここで語られるのはアンの苦しい胸中ではなく、役に立とうとピアノ伴奏を申し出る彼女の姿なのである。

The evening ended with dancing. On its being proposed, Anne offered her services, as usual, and though her eyes would sometimes full with tears as she sat at the instrument, she was extremely glad to be employed, and desired nothing in return but to be unobserved. (66)

アンは、若々しく愛らしいヘンリエッタやルイーザとダンスをする大佐の姿を見て、8年前には誰よりも親しく理解しあっていた自分たちの関係を思うにつけても、悲しみに胸がいっぱいになって涙が流れそうになっている。しかしここでのアンは、役目を与えられていることに喜びを感じる性質のために悲しみに没頭することがなく、気持ちを立て直すことに成功している。アンは不条理な苦しみを自分の中だけで処理し、日常性から逸脱するような感情への溺れ方を避けているのだ。『分別と多感』(Sense and Sensibility)の主人公の一人マリアンヌ (Marianne Dashwood) は、恋人であるウィロビー (John Willoughby) との恋が破れた時、ジェニングス夫人 (Mrs. Jennings) などの友人の前で自分の怒りや悲しみを爆発させたり、最終的には病に陥ったりして、周囲の人を大変心配させた。これは日常性を乱す方向性の行為であるが、アンの行為はそれとは対極の、日常性を保とうとする方向性を持っていると言えよう。

3. 2. 詩歌に対してのアンの距離

不条理な苦しみと日常性の均衡を保とうとするアンの態度は、彼女の詩歌に対する向き合い方にも表れている。それはアンがウェントワース大佐とマスグローブ姉妹、そしてメアリとその夫とともに出かけたウィンスロブ (Winthrop) への遠足の場面に読み取れる。アンは、観察の結果、ウェントワ

ース大佐がマスグローブ姉妹のどちらにも恋はしていないと結論付けていたが、彼らの邪魔をする権利などないので、この遠足の間の心構えとして、次のような思いを抱いていた。

Anne's object was, not to be in the way of any body, and where the narrow paths across the fields made many separations necessary, to keep with her brother and sister. Her *pleasure* in the walk must arise from the exercise and the day, from the view of the last smiles of the year upon the tawny leaves and withered hedges, and from repeating to herself some few of the thousand poetical descriptions extant of autumn, that season of peculiar and inexhaustible influence on the mind of taste and tenderness, that season which has drawn from every poet, worthy of being read, some attempt at description, or some lines of feeling. (78)

この遠足の間、アンは自分の楽しみを、運動や景色そのもの、そして秋という季節について歌った千もの詩句を暗誦することに見出そうと決心している。彼女はできる限りそうした瞑想や暗誦によって心を満たそうとしていたのだが、ウェントワース大佐とルイーザの会話が聞き取れるほどの近さにいる時は、アンは瞑想や詩の引用どころではなくなり、その意識はたちまち彼らの話の内容に引きつけられる。そしてルイーザの言ったあることが、アンの心をとらえた。ウェントワース大佐が、姉夫婦の馬車は時々ひっくり返ることがあるのだが、姉は馬車から放り出されても平気なのですよ、と冗談めかして言うと、それを聞いたルイーザが大変情熱的に、自分も大佐の姉と同じことをすると答え、他の人に安全に運んでもらうよりも、愛する人とずっと離れずにいて、一緒に放り出された方がいい、と言ったのだ。アンはこの会話から、ルイーザが彼に対していかに情熱的な愛情を抱いているかを思い知らされたために、衝撃を受けているのである。ルイーザが大佐にその真剣な愛情を向ければ、たとえ彼が今ルイーザのことを愛してはいないにしても、彼らが結婚してしまう可能性は大いにある。アンがウェントワース大佐と恋に落ち婚約したのは19歳の時であったが、8年後の時点で皮肉にも同じ年齢に設定されている19歳のルイーザが、当時のアンになり代わったように大佐

と結婚してしまうという悲しい予感が、ここでは提示されている。二人の会話を聞いた時の彼女は苦しみのあまり、すぐには秋の詩歌の暗誦に意識を戻すことができない。次のように描写される。

Anne could not immediately fall into a quotation again. The sweet scenes of autumn were for a while put by – unless some tender sonnet, fraught with the apt analogy of the declining year, with declining happiness, and the images of youth and hope, and spring, all gone together, blessed her memory. (79)

ウェントワース大佐とルイーザの関係に思いを巡らせるアンは、秋の美しい景色を歌った詩歌の暗誦にはすぐに意識を戻せないが、「秋という衰えつつある季節と衰えつつある幸福との適切な類比と、若さと希望と春がすべて一緒に去ってしまったというイメージとに満ちた何か甘いソネット」を思い起こすことができれば、詩歌の暗誦に意識を戻せたという。そのソネットはまさに、愛する人を失い、人生の秋を寂しく生きているアンの現状をよく表したもので、人生の春を幸福に生きているルイーザとの対比もまた想起させる。ここで注目すべきは、彼女の現状にあまりにも似つかわしいそのソネットが、アンの心を長くはとらえないということである。あるいは、憂鬱な秋のソネットを思い起こすことができず、ウェントワース大佐とルイーザの関係に思いを巡らせて詩歌の暗誦どころでなく沈んだ気持ちに襲われていたとしても、彼女はすぐにソネットの世界や気落ちから現実の世界に向き直り、一行が別の道に入ったことに気がつく、自分を奮起させて“Is not this one of the ways to Winthrop?” (79) と発言するのだ。そうしてウインスロブの方面に進みながらアンが目にしたのは、「詩的憂鬱を歌う甘美さに対抗して、もう一度春が来ることを示している耕作地や出来立ての畦道のある大きな土地」(79)である。彼女が目にしてこの情景は、もう一度春が来ることを信じて、詩的憂鬱の甘美さ、ひいては自身の不条理な情念に浸ることに抵抗しようとするアンの無意識を象徴していると考えられる。アンは秋の憂鬱のような自らの現状に似つかわしい甘いソネットに浸ることなく、すぐに現実の情景に目を向けているからだ。このように、アンの心は、不条理な苦しみに少しの間とらわれることはあっても、必ず日常生活に復帰する。

3. 3. アンの対比者としてのベンウィック大佐

ウェントワース大佐の友人士官たちの住まいがある温泉地ライム (Lyme) で、アンはベンウィック大佐 (Captain Benwick) という人物に出会う。彼は、詩歌に対する態度において、ひいては、自身の情念との向き合い方において、明らかにアンの対比者として描かれている。彼は1年前に愛する婚約者を亡くして以来、失意に深く沈んでいる。喪失感に苦しむ彼の姿は、8年前に婚約破棄という形で恋人を失い、愛着と後悔に苦しんだアンの姿と重なる。ただしベンウィック大佐の、自身の深い悲しみに対する向き合い方は、アンのそれとは大きく異なる。彼の友人であるウェントワース大佐は、ベンウィック大佐の気質について、次のように語る。

He [Captain Wentworth] considered his [Captain Benwick's] disposition as of the sort which must suffer heavily, uniting very strong feelings with quiet, serious and retiring manners, and a decided taste for reading, and sedentary pursuits. (90)

自分一人で行う読書や座業を好むベンウィック大佐は、自身に苦しみをもたらすような強い情念を抑制するのではなく、孤独の中で増長させてしまう傾向にある。もともと内気な性格であることも相まって、彼は自分の殻に閉じこもってしまい、人の輪に入って明るい話をすることも拒む。そのような彼の態度は、彼の同居人であるハーヴィル (Harville) 大佐夫妻をしきりに心配させている。彼らの役に立ちたいと考えたアンは、自らベンウィック大佐の話し相手になる。ベンウィック大佐は、現在の自身の心にびつたりと符合する、不幸を嘆く心を想起させるような詩を繰り返し口ずさみ、アンに理解を求めるが、アンは彼に賛同せずに次のように答える。

she ventured to hope he did not always read only poetry, and to say, that she thought it was the misfortune of poetry, to be seldom safely enjoyed by those who enjoyed it completely; and that the strong feelings which alone could estimate it truly, were the very feelings which ought to taste it but sparingly. (94)

ここから、詩にあまりにも深く感動してしまうとかえって毒であるので、控

えめに味わうことが肝要である、というアンの考え方がうかがえる。つまり、アンはベンウィック大佐が自身の苦しみを助長するような行為をしていることを、控えめながらも諫めているのだ。アンは彼に、道徳的あるいは宗教的な忍耐に関する散文を読むように勧める。ベンウィック大佐はアンに感謝してその助言を受け入れるのだが、日常性を逸脱するほどに失意に沈み込みやすい彼の気質は、そう簡単には変わらない。

さて、ベンウィック大佐が登場するライムでは、本作品において最も大きな事件が起こる。アンたち一行は、ライムを去る前に、海岸線の絶壁部を散歩することになる。そこでルーザが絶壁の段差を飛び降りてみたいと言い張り、その結果地面にたたきつけられ気絶してしまったのだ。その場にいる誰もが冷静さを失う中、アンだけは事態の收拾のために尽力した。そして、この痛ましい事故から一か月以上が経過したある日、父と姉のいる温泉地バースに移っていたアンは、ライムから手紙を受け取り、ベンウィック大佐とルーザが婚約したことを知って驚く。このエピソードは、ルーザからウェントワース大佐を解放するという意味でプロット上必要なものだが、このエピソードが仄めかしているそれ以上に重要な意味とは、アンの対比者であるベンウィック大佐が「心変わりをした」ということである。ベンウィック大佐は婚約者ファニー（Fanny）を心から愛していたという。しかしそのファニーを失って以来1年以上失意に沈んでいた彼は、ルーザという別の女性に心変わりをすることで、新たな幸福を得る道を選んだのだ。ベンウィック大佐はアンと違って、自分の苦しみを増長させるような詩歌に浸る習慣があり、感情に溺れやすい気質であるからこそ、相手を失ってもなお愛情を貫く苦しみに耐えきれず、かえって他の女性に心が移っているのだ。この点で、感情に溺れることがなく、ウェントワース大佐を失ってもなお心変わりをせずに愛し続けているアンと、好対照をなしていると言える。

ベンウィック大佐の心変わりのエピソードには、過去への不条理な執着という苦悩から人間の心が救われる、という肯定的な一面があることは否定できない。ベンウィック大佐はアンとは違い、自身の情念と距離を取ることが不得意な人物として描かれている。そのような彼の気質を考えると、婚約者を失った悲しみに沈み続けるよりも、ルーザという新たな恋人と生きてい

く方が幸福であるということが予想される。つまり、望みがなくなっても長い間心変わりをしないということには大変な苦しみが伴うため、ベンウィック大佐のように古い恋を捨てて新しい恋を求めることは、幸福になるための一つの選択肢として否定されてはいないと考えられる。しかしながら、作品は、ベンウィック大佐のような心変わりについて、擁護まではしていない。ベンウィック大佐の亡き婚約者の兄であるハーヴィル大佐が、ベンウィック大佐のあまりに早い心変わりを嘆く様子は、アンとの会話を通して印象的に描かれる。また、ウェントワース大佐も、ベンウィック大佐ほどに愛情深い男が心変わりをして立ち直るなんて考えられないと言い、その相手がルイーザだということにも、ベンウィック大佐の方が優れた心を持っているという理由をほのめかして、驚きを隠せなかった。ハーヴィル大佐の嘆きが示唆するように、彼らの愛情は非常に短い期間に急速に育てられたものである。またウェントワース大佐の驚きが示唆するように、彼らは趣味や人格の点で、やや釣り合いがとれていない。つまり二人の婚約は急繕いの感が否めず、その潜在的な問題点が示されているのだ。しかしながらここで作品が強調しているのは、ベンウィック大佐との対比による、アンが長い間心変わりをしていないことの価値であろう。アンは不条理な情念から距離を取って心の均衡を保つことで葛藤の苦しみに耐え、ウェントワース大佐への純粋な愛情を保持することに成功しているのである。逆に言えば、彼女の夫大佐への純粋な愛情は、葛藤に長い間耐え続けたからこそ、維持され得たと言うことである。ここに、アンが葛藤の苦しみに耐えたことへの意義が与えられている。

3. 4. アンと「忍耐」の距離

とは言え、心の均衡を保ち、永遠に忍耐することがオースティンの意図した教訓であるかと言うと、そうではないということも読み取れる。詩に耽溺するベンウィック大佐に対して、アンは道徳的あるいは宗教的な忍耐に関する散文を読むように勧めたが、そのような自身の振る舞いについて、ふと懐疑的な思いも抱いているからである。

When the evening was over, Anne could not but be amused at the idea of her

coming to Lyme, to preach patience and resignation to a young man whom she had never seen before; nor could she help fearing, on more serious reflection, that, like many other great moralists and preachers, she had been eloquent on a point in which her own conduct would ill bear examination. (94)

アンは、初対面のベンウィック大佐に「忍耐」と「諦め」を説くために自分はライムに来たのかと思うと可笑しさを感じずにはいられなかったし、もつと真剣に反省すると、自分でも審査に耐えられないようなことについて、得々と説いていたのではないかと恐れずにはいられなかったと考えている。アンはそれまで、苦しみに浸る感情的なベンウィック大佐と対比して、自分自身を「忍耐」と「諦め」のできる理性的な人間として意識していたが、ふと、そのような自分の態度に可笑しさや不信を抱くのだ。忍耐することに特化した自身の態度さえも、彼女は全面的に支持するのではなく、距離を置いて見ている。つまり、オースティンは忍耐とアンの上に距離を差し込んでいるのであり、忍耐そのものに全面的な価値を与えているわけではないのだ。むしろ葛藤に耐えた先でヒロインが得るものに、より本質的な価値が与えられていると考えるべきであろう。葛藤の末にアンが獲得したものは何かということについては、次章で確認したい。

4. アンと葛藤の決着—過去の受容

4. 1. アンと理想と現実の乖離

アンはウェントワース大佐への諦めきれない恋心と、その恋心を抱き続けることの不毛さの間で葛藤し、自らの過去が正しかったのか間違っていたのかという評価を揺れ動かしながら、苦しんできた。その苦しみは大変なものだったが、感情を抑制することで決して日常性から逸脱することのないアンと心の強さが、結果的にウェントワース大佐への愛情を維持させている、ということを前章までで確認した。アンは何度も繰り返しウェントワース大佐のことで心を乱し、その度に繰り返し日常性の中に復帰している。このアンと意識の反復は、独特な哀愁と、独特な心の強さを感じさせる本作品の雰囲気

気を形成している。そして、この同じような意識の反復によって、アンの心には確かに変化が生じていき、ついには決着を迎えることになる。

しかし決着を迎えるまでの間、アンの心は揺れ動き続ける。本作品の後半の主な舞台は、エリオット家がケリンチから移り住んだ場所であるバース(Bath)である。父と姉に遅れる形で、マスグローブ家と過ごした土地からバースに移ってきたアンは、“Anne entered it[the house] with a sinking heart, anticipating an imprisonment of many months, and anxiously saying to herself, ‘Oh! When shall I leave you again?’” (128) と考え、心の通わない父と姉に押さえつけられる「牢獄」のような今後の生活を予想し、落ち込んでいる。あらゆる場所を移動し、新たな友人たちに出会ったアンは、その経験によって、自分の理想とする生き方を知り、その理想と現実の乖離を知っていた。特にライムにおいて、ウェントワース大佐の友人であるハーヴィル大佐の家を訪ねた際、その工夫を凝らした暮らしぶりに、アンは言葉にならないほどの感銘を受けていた。そして彼女は、その家庭的な幸福の図は、ウェントワース大佐と結婚していたら自分も手にしていたはずのものである、と感じずにはいられなかった。ここから、アンが理想とする家庭的な幸福がどのようなものであるかが読み取れ、また同時に、彼女が実際にはその幸福を手にすることができず、「牢獄」に身を置かなければならないという現実も浮き彫りになっている。バースに到着した時点でのアンは、まだ過去への後悔を捨てきれず、葛藤のただなかにいることがわかる。

4. 2. ウェントワース大佐の対比者としてのエリオット氏

アンはバースで、エリオット家の財産相続人であるウィリアム・エリオット氏(Mr. William Elliot)と出会う。彼はライムにおいて、爽快な風にあたって顔色が生き生きとしていたアンを通り過ぎざまに見て、すっかり彼女に恋をしてしまっていた。エリオット氏はアンに、バースでまた会えて嬉しいと言い、ライムでの事故を目撃したアンの苦しみを大変に思いやった。そんな彼に対するアンの第一印象は概して良いものだった。ラッセル夫人は、エリオット氏の振る舞いの優雅さに心を奪われ、彼こそアンの結婚相手としてふ

さわしい男性であると断言し、アンが未来の「エリオット夫人」になることを望んだ。「エリオット夫人」になることの魅力は、一瞬だけアンの心をとらえる。

Anne was obliged to turn away, to rise, to walk to a distant table, and, leaning there in pretended employment, try to subdue the feelings this picture excited. For a few moments her imagination and her heart were bewitched. The idea of becoming what her mother had been; of having the precious name of “Lady Elliot” first revived in herself; of being restored to Kellynch, calling it her home again her home for ever, was a charm which she could not immediately resist.

(150)

アンはケリンチ邸（Kellynch）の推定相続人であるエリオット氏と結婚すれば、冷淡で心の通わない父と姉に投獄されたような「牢獄」の生活から脱することが可能となり、さらに、尊敬すべき母親が占めていた地位をそっくり受け継ぎ、愛着のある我が家に永住することができるようになるからだ。このようにアンは、エリオット氏との結婚によって自分は幸せを手に入れられるのではないかと一瞬考えている。これは大いに打算的な思考である。『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*）に登場する主人公の友人シャーロット・ルーカス（Charlotte Lucas）は、愚かな牧師コリンズ氏（Mr. Collins）と打算的な結婚をする。いみじくもアンと同じ27歳という年齢のシャーロットは、社会的地位や安定した家庭生活を手に入れるために、夫となるコリンズ氏の人格は無視して、彼との結婚を選んだ。エリオット氏との結婚のメリットについて考えている時のアンは、シャーロットと同じような思考をしていることになる。しかしアンの場合は、相手であるエリオット氏の人格のことを考えると、ケリンチ邸の魅力も女主人となることの魅力も、すぐに色褪せたという。アンは、彼を受け入れることはできないという気持ちに至る。その理由については、次のように述べられている。

Mr. Elliot was rational, discreet, polished, -- but he was not open. There was never any burst of feeling any warmth of indignation or delight, at the evil or good of others, This, to Anne, was a decided imperfection. Her early impressions were incurable. She prized the frank, the open-hearted, the eager

character beyond all others. Warmth and enthusiasm did captivate her still.

(151)

つまり、エリオット氏はアンが重視する率直さに欠け、憤慨や喜びといった人間らしい感情の発露が一切ないのだ。このことは、エリオット氏の人格に対してアンが低い評価を下していると同時に、ウェントワース大佐の率直な人格に対して彼女が今でも高い評価を与えていることを示している。ウェントワース大佐に関しては、たとえばウィンスロプの遠足の際、優雅さに欠けるからという理由で、メアリがその土地とそこに住む人々を口ひどく罵ったのを見て、彼の目に軽蔑の感情が浮かぶという場面があった。アンの目は彼のその感情の表出を、共感とともにとらえていた。このように、ふとした拍子にちらりと表に現れる正直な感情こそ、アンにとっては最も価値のある、愛すべきものののだ。エリオット氏にはそれが無い。だから、アンはエリオット氏に好印象を抱きつつも、彼と自分の結婚は不可能だと考える。アンは彼との結婚で手に入るであろう形式上の幸福よりも、心の結びつきによって得られる精神的な幸福を重要視しているのだ。アンはここで、エリオット氏と比較することで、むしろウェントワース大佐の人格の魅力と、彼に対する自分の愛情の強さを再確認する形になっている。

4. 3. アンの葛藤の決着

アンとウェントワース大佐はバースの演奏会で顔を合わせ、ライムでの出来事について話をする。すると話題の焦点はルイーザとベンウィック大佐の婚約のことになり、ウェントワース大佐は、ベンウィック大佐が心変わりをしたことに対して驚きを表明する。ウェントワース大佐は、優れた女性に心を捧げていたベンウィック大佐が、その女性を亡くして立ち直れるはずがない、と力説するが、それは明らかにアンに対する自分の気持ちの表明となっている。つまりウェントワース大佐は、素晴らしい女性であるアンに心を捧げた自分は、その恋心を簡単に捨てて立ち直ることなどできない、と言っているのと同義なのである。この彼の熱心な態度は、その心がアンに帰っていることを示しており、彼の愛情を確信したアンの心は感慨で溢れる。

彼女はバースに到着した時の暗い気持ちから一転して幸福感を抱いているが、それは、同じ場所にいる姉エリザベスの虚栄心に満ちた幸福感が家の豪華絢爛さから生じているものであるのと対照的に、内心から湧いたあたたかな幸福感であると描かれている。この「内心から (from within)」という言葉は注目に値する。彼女の幸福が外的な要素ではなく、内的な要素によって生み出されていることが暗示されているからだ。つまり、ここでのアンの幸福感は、ウェントワース大佐の愛情が自分に帰ってきていることに喜びを感じる自身の感情にこそ、源泉を持っていると考えることができる。

そしてついに、アンはウェントワース大佐を巡る自身の葛藤に、決着を見出す。アンは、病気の療養をしている学生時代の友人であるスミス夫人 (Mrs. Smith) を訪ねるためにバースの通りを歩きながら、ウェントワース大佐に対する自分の思いについて、次のように考える。

How she might have felt, had there been no Captain Wentworth in the case, was not worth enquiry; for there was a Captain Wentworth: and be the conclusion of the present suspense good or bad, her affection would be his for ever. Their union, she believed, could not divide her more from other men, than their final separation.

Prettier musings of high-wrought love and eternal constancy, could never have passed along the streets of Bath, than Anne was sporting with from Camden-place to Westgate-buildings. It was almost enough to spread purification and perfume all the way. (179)

アンは、現在の膠着状態の結果がよかろうと悪かろうと、自分の彼への愛情は永遠に変わらないだろう、と考えている。そして、自分と大佐が結婚したとしても、結婚しなかった場合と比べて、自分の心が他の男性からより大きく切り離されることはないだろう(=大佐と結婚できようと結婚できまいと、大佐以外の男性を愛さないことは同じであり、大佐だけを愛し続けるだろう)、とアンは信じている。それまでのアンは、彼への愛情を抱き続けることの不毛さが心に巣くっていて、このように自分の感情を正面から受容することはできていなかった。それが、ここに至って初めて、アンはウェントワース大佐への自分の愛情が一生変わらない純粋なものであることを認め、成就しよ

うとすまいと、その愛情を大切に保持していこうと決心しているのだ。彼女は、ウェントワース大佐への純粋な愛情を保持すること自体に、このうえない幸福を見出していると言える。まさに、「内心」から湧き出る幸福感を彼女は享受している。この時の彼女の心からはもはや、結婚しないことで父と姉の家から脱出できなくなるかもしれないという不安は消え去っている。この時代の社会規範に照らすと、紳士階級の娘の心情としては、シャーロットがそうであったように、結婚せずに家にとどまり続けることを恐れるのが当然であった。しかしアンは、父と姉の家で一生尊重されることなく生きていくとしても、ウェントワース大佐への愛情を保持することで、自分は幸福になれる、と考えているのだ。彼女は冒頭で抱えていた二重の苦しみを、自らの努力で克服していると言える。それを可能にしたのは、ウェントワース大佐への愛情、あるいは自分の過去を巡る葛藤に、アンが決着を見出したことなのである。アンはもはや、後悔の残る過去を無理やりに正当化するヒロインではなく、過去が残した葛藤を見事に乗り越えたヒロインとして、力強く生き生きと息づいているのである。

5. 新しいヒロインとしてのアン

オースティンは本作品のヒロインのアンに、他の作品と同様、結婚というハッピーエンドを与えている。しかし、この結婚という結果があってもなくても、ウェントワース大佐への自分の純粋な愛情は一生消えることはないだろう、というヒロインの自覚こそ、この作品が強調している内面的なテーマだと考えられる。アンは過去を巡る葛藤に耐え、自分の愛情の所在をひたすらに探し続けた結果、結婚が象徴する制度性や個人的打算すら超越した、自らの純粋な愛情を受容するに至っている。つまりアンは、愛情の純化・昇華ともとれる域に達しているのである。この点において、アンはオースティンが創作した新しいヒロインであると言える。そしてここには、一貫して結婚の問題を描いてきたオースティンの、「純粋な愛情」に対する信頼や賛美のよ

うなものが感じられる。

オースティンは20歳の時に、アイルランド人のトーマス・ルフロイ(Thomas Lefroy)という男性に出会い、生涯で唯一の恋をしたといわれる。しかし彼はそれほど裕福ではない軍人の父親と5人の姉を持つ長男であったため、財産のない牧師の娘であるオースティンとの結婚は、彼の家族による反対に遭った。そのため、オースティンは彼との結婚を諦めざるを得なかった。作者のこの経験は、ラッセル夫人に反対されて大佐との結婚を諦めたアンの姿に投影されていると考えてよいだろう。そして1802年、オースティンが27歳の時に、彼女はハリス・ビッグウィザー(Harris Bigg-Wither)という裕福な家庭の青年に求婚され、一旦はそれを受け入れたが、トーマスへの恋心を思い出し、やはりハリスとは結婚できないという結論に至ったという。27歳という、当時であれば女性が結婚することのできるぎりぎりのタイミングでオースティンが打算的な結婚の道を選ばなかったことは、『説得』においてアンがエリオット氏との結婚を選ばなかったことにつながるだろう。オースティンは、アンとは違って最終的に恋を実らせることなく独身で生涯を終えているが、その晩年まで、トーマスへの情熱的な恋心を忘れずにいたという。生涯独身だったオースティンにとって、純粋な愛情は、自身を支える大切なものだったのではなかろうか。オースティンは『説得』において、ヒロインに過去を巡る葛藤を乗り越えさせることで、作者自身の過去の愛情をも昇華させたのだと考えられる。

6. 結論

『説得』は、主人公アンの内面の葛藤とその決着を描いた物語である。アンが、ウェントワース大佐を巡る過去を引きずる影の薄いヒロインから、葛藤を乗り越え自らの幸福を探り当てた力強いヒロインに変化するまでの過程を、この作品は描いている。アンは葛藤に耐える絶え間ない努力によってウェントワース大佐への愛情を保持し、彼と結婚できようとできまいと、その純粋な愛情を生涯保持していくことに幸福を見出すに至った特別なヒロイン

である。自らもまた妥協の結婚を選ばず、一人の男性への愛情を生涯抱き続けた作者オースティンは、彼女の最後の作品である『説得』で、主人公に長年にわたる内的葛藤を乗り越えさせることによって、作者自身の過去の愛情や人生の葛藤を昇華させたのだ。

参考文献

- Austen, Jane. *Persuasion*. Penguin Classics, 1998.
- . *Emma*. Penguin Classics, 1996.
- . *Pride and Prejudice*. Penguin Classics, 1996.
- . *Sense and Sensibility*. Penguin Classics, 1995.
- Banks, Joseph Ambrose, and Olive Banks. *Feminism and Family Planning in Victorian England*, Liverpool UP, 1964.
- Brooke, Christopher. *Jane Austen: Illusion and Reality*. St Edmundsbury Press, 1999.
- Craik, W.A. *Jane Austen in her time*, Thomas Nelson and sons LTD, 1969.
- Crane, R. S. "Jane Austen: *Persuasion*." *Jane Austen: Critical Assessments Mansfield Park; Emma; Persuasion; Sanditon*, vol. 4, edited by Ian Littlewood, Mountfield: Helm Information, 1998, 422-437.
- Duffy, M. J. "Structure and Idea in Jane Austen's *Persuasion*." *Nineteenth Century Fiction*, 8(1953-54): 272-289.
- Gay, Penny. "Emma and *Persuasion*." *The Cambridge Companion to Jane Austen*. 2nd ed., edited by Edward Copeland and Juliet McMaster, Cambridge UP, 2011, 63-71.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse*. Translated by Jane E. Lewin, Basil Blackwell, Oxford, 1980.
- Gomme, Andor. "On Not Being Persuaded." *Essays in Criticism*, 16(1966):170-184.
- Grey, John David. Ed. *Jane Austen's beginnings: the juvenilia and Lady Susan*. UMI Research Press, 1989.
- Honan, Park. *Jane Austen: Her Life*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1987.

- Johnson, Judy van Sickle. "The Bodily Frame: Learning Romance in *Persuasion*." California: U of California P, 1983, 43-61.
- Kadota, Mamoru. "Was Anne Elliot Truly Persuaded?: On the Heroine's Psychological Independence in Jane Austen's *Persuasion*." Japan: *Bull. Nara University Education* 64.1(2015): 161-176.
- Kaneko, Yayoi. "Anne Elliot and Captain Wentworth as a New Type of Couple in *Persuasion*." Japan: *Gakuen the Bulletin of Showa Women's University*, Spring 2013: 61-71.
- MacCarthy, Desmond. "Unity of Effect." *New Stateman*, 31(1928): 669.
- Matsumoto, Kei. *Jane Austen no Sekai* [Jane Austen's world]. Japan: Kindai Bungeisha, 2011.
- Monaghan, David. "The Decline of the Gentry: A Study of Jane Austen's Attitude to Formality in *Persuasion*." *Studies in the Novel*, 7.1, Spring 1975, 73-87.
- Uematsu, Midori. *Jane Austen to Ojyousama Hiron* [Jane Austen and heroines from upper-class families]. Japan: Ashahi Shuppansha, 2011.
- Wiltshire, John. *Jane Austen and the body*. Cambridge UP, 1992. 155-196.
- Woolf, Virginia. *The Common Reader*. The Hogarth Press Ltd., 1957, 168-183.